
受験戦争

西内京介

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

受験戦争

【Nコード】

N8691Z

【作者名】

西内京介

【あらすじ】

都内屈指の新学校で、受験を控えた三年生が自殺した。警察は受験のプレッシャーによる自殺と断定し捜査は打ち切られようとしたが、疑問を抱いた刑事館林は、ちょうど教育実習で訪れていた瀬郷洋輔に捜査協力の依頼をする。自殺した生徒は、成績も学年トップで、このままいけばどの大学にも入学できるはずだった。それなのにこの時期での自殺は、正直解せないというのだった。進めていくうちに、捜査線上に浮かび上がった二人の容疑者。二人とも、成績同率二位を誇る実力者だった……。

次々と浮かび上がる、それぞれの思惑。果たして自殺か、他殺か。全てのピースがそろった時、驚愕の真実が明らかになる。

序章（前書き）

どうも。かなりしばらくぶりの投稿になります。西内です。

この小説は、自分の中でもまあまあ納得のいく作品に仕上げるこ
とができた、と思います。三人称で長編を書き上げられたことで若
干テンションがあがっているからかもですが。

皆様に最後まで読んでいただければ、これほどの幸いはありませ
ん。

序章

青年は目を閉じ、自分の生命を確かめるように、ゆっくりと息を吐いた。両手を広げ、風を全身で受け止めようとしている。

気持ちいい。

口には出さず胸中で呟いた後に、青年は再び目を開け眼前に広がる光景を、まるで無邪気な子供のようないきなり見下ろしていた。

この町は、なんて綺麗なのだろう。

青年は思ったことを口には出さず、胸の内で呟いた。口にしたところで、自分の気持ちを分かち合う人なんてこの場にはいないのだからという、諦めにも似た思いがあったからだ。

一瞬、強い風が吹きつけ青年は危うく落ちそうになったが、なんとかフェンスの網を掴み、堪えた。

風なんかには殺されてたまるか、どうせ死ぬなら自分で。

その決意は固かった。揺らぐことなく、遺書を書き、屋上のフェンスを乗り越え、ようやくここまでやってこられたのだ。風のせいで、生涯を終えることがあってはならない。

しかし、後一步。後一步を踏み出すことが出来なかった。

もう少しなのに。

悔しさと、自分の情けなさに涙を堪えきることができなかった。

まさか、後悔しているのか。

心の底から涙を流している自分に気づき、自問した。残念ながら、答えを出すことは出来なかった。

もう十分じゃないか。

その時、学ランのポケットに入れてあった携帯が震えた。誰からか、着信が入ったのだ。

自殺する前に人と話すのは、あまり気が進まなかった。人と話すことにより、死への躊躇いが生じてしまう可能性があったからだ。

た。

どうすればいいか、そう迷っていると携帯が鳴り止んだ。

慌ててポケットに手をつ込み、携帯を取り出した。画面を開いて、かけてきた人物を確認する。

それは、この学園で唯一の友達からの着信だった。

数秒迷った挙句に、青年は自ら友達の携帯に掛け直した。

「もしもし……」

会話は数分続き、青年は携帯を切って夕空を仰いだ。

あいつは何を考えているんだか。

口元に微笑を浮かべながら胸中でそう呟くと、フェンスに背中を預けて携帯をポケットにしまった。

本心から言うと、友達からの着信は嬉しかった。けど、やはり複雑な心境であった。

揺らぐ決意　ここまで来たのに、また引き下がることになってしまふのか。

顔に、いよいよ突き刺さるような痛みを伴う風が吹いた頃、後ろのほうでドアノブが回る音がして、反射的に青年は振り向いた。

ドアは、まるでスローモーションのようにゆっくりと開いていく。青年はそれをじれったく思い、歯軋りをした。

早く来いよ。

やがて、ドアは完全に開かれた。

第一章

不意に、今まで聞いたことのないような、不快感極まりない音が耳に入ってきた。

瀬郷洋輔は読んでいた本を閉じて、ゆっくりと音のした方向へ顔を向けた。

音が聞こえてきたのは、ここからそう離れていないな。そう思い、席を立って洋輔は図書室を出た。

洋輔は某有名大学に通う二年生で、教育学部に所属している。専攻は歴史。教育実習生として、洋輔は今日、都内でも屈指の進学校、宝徳学園へとやってきた。

今日は初めてということあって、教室の後ろで世界史の授業を見学しているだけだったが、早くも洋輔の心は折れかけていた。

生徒の出来が、想像以上によすぎるのだ。自分よりも、もしかしたら頭がいいかもしれない。そんな不安が、洋輔によぎった。高校生より頭が悪いと示しつかない。そう危惧した洋輔は、閉館時間のギリギリまで、宝徳学園の図書室で勉強しようと考えたのだ。

その最中に、遠くから肉の潰れたような音がしたのだ。集中力は途切れ、同時に洋輔の好奇心を駆り立てた。

宝徳学園の敷地面積は広大なため、まだどこに何があるのか把握できておらず、図書室を出てから洋輔は早速迷った。自分がどこを歩いてきたかさえ、記憶が曖昧だった。

とりあえず、出てきたからにはあの音の正体を突き止めなければならぬ。そんな使命感にも似た思いを抱きつつ進んでいると、窓の向こうに人だけが見えた。

「なんだ？」

目を凝らして、人だけを見ている。

宝徳学園には三つの校舎がある。一二年の教室が主の、第一校舎三年の教室と、進路のための資料室が設けられている第二校舎。図書室や保健室、食堂などがあるのは第三校舎で、この三つの校舎は縦に三列で並んでおり、二階の渡り廊下によって繋がれている。洋輔がいるのは、第三校舎の一階。人だかりがあるのは、第三校舎と第二校舎の間に位置する中庭である。

洋輔は足早に人だかりを目指した。

外へ出るための通用口を開き、今度は駆け足で人だかりのもとへ向かう。

数十人の生徒たちは、真ん中にあるものを取り囲むようにして集まっていた。

「なんだよ……これ」

動揺する声が、ちらほらと聞こえてきた。中には、嗚咽も聞こえてくる。洋輔の好奇心は、それに比例するようによまます高くなっていた。

洋輔は、生徒たちが取り囲んでいるものは何なのか覗こうと背伸びを試みるが、如何せん身長には恵まれていなく、しかも前にいる男子生徒の身長がかなり高いため、何を取り囲んで動揺しているのか見えなかった。

「あ、先生」

一人の女生徒が洋輔の存在に気づき、振り返って声をかけてきた。その女生徒のことはよく覚えていた。今日の昼休み、声をかけてきた女の子だ。

宝徳学園は先ほども説明した通り都内屈指の進学校で、生徒たちはお互いをライバル視しており暗い子が多いのだが、声をかけてきた女子は他の生徒たちとは正反対の明るい子で、食堂でメニューを眺めていた洋輔に、気さくに声をかけてきたのだ。そのため、彼女のことは洋輔の記憶に強く残っていた。

そんな彼女が、今泣いているのだ。目は充血しており、今も頬に涙が伝っている。どうして泣いているのか、洋輔には皆目見当がつか

なかった。

心配になった洋輔は、生徒たちを強引に掻き分けて取り囲んでいたものを見た。

それを見た瞬間、絶句した。

洋輔の目の前には、血の池が出来ていた。内臓やら脳が飛び出ている物体が、そこにはあった。見る限り男子生徒のようだが、学ランがなければおそらく判別がつかなかっただろう。それほどに、凄惨な死体だった。これはいったいどういうことなのか。

状況をよく理解できず、洋輔は頭の中で瞬時に様々なことを思い浮かべた。

その中の一つに、投身自殺という四文字がよぎり頭上を見上げた。唯一、第三校舎には屋上がある。そこから、この男子生徒は飛び降りたというのか。

そう考えると、途端に眩暈が襲ってきて、膝をついた。洋輔に声をかけた女子は短い悲鳴を上げ、前にいる男子生徒は彼女の悲鳴に驚いてこちらを振り返った。

「先生、大丈夫？」

女生徒は、手に握り締めていた紙を丸めてポケットにしまうと、心配そうな声を上げて洋輔に駆け寄った。その声に若干の安心感を抱きつつも、やはり心の中にある不快感を払拭することは出来なかった。

図書室で聞いた肉の潰れる音の正体は、この男子生徒が飛び降りて地面に衝突した時の音だったのだ。

そう思うと背筋に悪寒が走り、吐き気がこみ上げてくる。洋輔が口に手を当てると、女生徒はそれを察して背中に手を当て、さすり始めた。周りの生徒たちは、洋輔達に注目している。

「どうしてこんなことが……」

鼻息を荒くしながら、洋輔は心の底から振り絞るように言った。

「おい、どうしたお前たち」

不意に、遠くから野太い声が飛んできた。生徒たちは、声の主を

振り返る。

近づいてきたのは、生徒たちから恐れられている体育担当の教師、山田哲郎だった。

この高校に通う生徒たちは勉強ばかりを必死に取り組み、運動部は一応存在するが所属している生徒は少ない。

つまり皆、体育が嫌いだ。

しかし山田は、体育の見学を相当な理由がないと認めなくて、生徒たちは嫌々体育の授業を受けている状況だ。生徒たちが嫌うのも無理はない。

そのゴリラみたいな顔と、身長百八十センチという大柄な体格がまた、生徒たちに別の恐怖を与えているといえる。

「何があった、ええ？」

生徒たちは萎縮して、山田に何も話そうとはしない。

「あれ、瀬郷君。どうした？」

女生徒に背中をさすられている洋輔を見た山田は、一瞬にやついた表情を浮かべ、中腰になって訊いて来た。

「いえ……あの……」

洋輔も、上手く説明することが出来ないので、代わりに男子生徒の自殺死体を指差した。怪訝そうな表情を浮かべつつも、山田は指さされたほうに顔を向けた。

男子生徒の自殺死体を見た瞬間に、みるみる山田の表情を青ざめていき、先ほどまでの威勢は感じられなくなった。

「あ……あ……」

口をパクパクさせ、山田も男子生徒の死体を指差していた。その光景は滑稽だったが、残念ながら洋輔もそれと同じような状態で、笑える立場ではなかった。

「と、とにかく、先生に知らせないと」

独り言のように呟くと、山田はどこかへ走っていった。職員室へと向かったのだろう。

「先生、とにかく保健室へ行こう」

女生徒に優しく声をかけられ、洋輔は情けない気持ちになりながらも、頷いた。今はとにかく休みたいのだ。

体を支えられながら、洋輔は保健室のある第三校舎へと戻った。

第二章

「先生つて、ついていないね」

保健室に入ってから、棚に並べてある薬品を眺めていた女生徒は、咳くようにいった。

「何が？」

気持ち悪いせいもあって、洋輔はぶつきらぼうに言った。

「だって、教育実習に来たのにこんな事件に出くわすんだもん」

女生徒の言葉には答えず、洋輔はしばらく辺りを見渡して、手近にあった椅子を引き寄せ座った。

「確かにそうだな」

改めて女生徒の言葉を考えてみると、納得のいく部分があった。

洋輔は、一ヶ月とはいえ教師の体験をするために宝徳学園へ赴いたのだ。高校教師というのは、中学生の頃からずっと抱いていた将来の目標でもあった。昨晩は、楽しみと不安でほとんど寝付けなかつたぐらいである。

待ちに待った教育実習の初日に、こんな事件に出くわすなんて誰が想像できただろうか。洋輔は狼狽を隠すことが出来なかつた。

「あれ……自殺だよな」

女生徒は依然薬品を眺めながら、後ろに座っている洋輔に訊いてきた。女生徒の口調には、まるで自分に言い聞かせるかのような響きがあった。

彼女自身も分かっているはずだ。あれは飛び降り自殺のなにものでもないということ。分かっているが、誰かに聞いたかった。洋輔には、そのように見えた。

女生徒の肩がかすかに震えているのに、洋輔は気づいた。そういえば、死体を見ていた彼女の目は赤かった。泣いていたのだ。

死体を見たから彼女は泣いたのか。女の子だから、それが普通の

反応なのかもしれない。実際、他の女生徒からも嗚咽が聞こえた。しかし洋輔は、はつきりと根拠があるわけではないが、女生徒が泣いたのは、死体を見た以外にも何か特別な理由があるような気がしていた。

洋輔が何か口を開こうとしたと矢先、奥の部屋から養護教諭の松平邦和姿を現した。その表情は、険しかった。

松平はオールバックにして髪を後ろにまとめており、山田に勝るとも劣らない体格をしていた。昔、いかにもスポーツマンだったという風格を漂わせている。洋輔は、松平と接するのに若干の抵抗を抱いていた。

「はい」

片手に持っていた物を、松平は洋輔に差し出した。それは、一粒の錠剤だった。

「吐き気が止まると思うから」

「けど、いいんですか。勝手に飲んじゃって」

他人から貰った薬を服用してはいけないと、何回か保健の先生に注意されたことがあるのを、洋輔は思い出す。

「大丈夫、大丈夫。市販だから、誰が使っても同じだよ」

宝徳学園には似つかないほど、松平の性格は楽観的であった。

「しかしまあ、驚いたね。生徒が自殺なんて」

松平がベッドに腰をかけた時、軋む音が保健室中に響いた。その音に洋輔は大げさに肩をびくつかせたが、薬品を眺めたままの女生徒は無反応だった。

「佳代ちゃん、詳しい話を聞かせてくれないか？」

と、松平は女生徒のほうへ顔を向けた。佳代と呼ばれた女生徒はようやくこちらへ振り向いた。佳代は、ぎこちない笑顔を浮かべていた。

「私、他の生徒たちのように中庭で勉強していたんです。そしたら突然、耳に不快な音が入ってきて、見たら人の死体があつて……」

喋っていくうちに感情が高ぶってしまったのだろう、笑顔を崩し

彼女は両手で顔を覆った。松平は後悔した表情を作り、再び洋輔のほうへ顔を向けた。

佳代はとつくのとうに限界を迎えていた。さきほど薬品を眺めていたのも、気持ちを紛らわすためだったのだらう。そして振り返った時、彼女は笑顔を浮かべていたが、やはり無理やり取り繕ったものだった。こちらに悟られまいと、懸命に振舞っていたのだ。

そんな彼女を、洋輔は不覚にも愛おしく思ってしまった。その感情の正体が果たしてどのような類のものなのか、幸いにも洋輔はつかめていなかったが、気づくまで最早時間の問題だった。

「しかし、どうして自殺なんか……」

「君は、自殺と断定しているようだね」

「は？」

松平は意味深な表情を浮かべた。

「自殺ですめばいいんだけどね」

「どういうことですか？」

洋輔が訊くと、松平は突然我に返った顔をして、やがて表情を和ませ言った。

「中年の、独り言だよ」

そんなこと言われても、洋輔には松平の言葉を独り言として聞き逃すことなんかできなかった。

自殺じゃなければなんなんだ　洋輔は、心の中で憤慨した。

「そういえば、君は今日来た実習生の一人だよね？」

「え、あ、はい」

唐突に話題を変えられ若干戸惑ったが、洋輔は頷いて言った。

「ついていないね、一目目だというのにこんな目にあって」

不謹慎だが、洋輔は吹き出しそうになった。佳代と同じ事を言っていたからだった。

「死体を見て、気持ち悪くなったのか」

松平はじつと洋輔の目を見つめながら、訊いてきた。洋輔は見栄を張ることなく、黙って頷いた。

「そうか」

頷きながら、松平はゆつくりと洋輔の手のほうへ視線を移動させ、しまったという表情を浮かべた。

「ごめんね、忘れていた。水だよ。そうだよ、水だよ。水がなきや、薬飲めないよね」

言いながら立ち上がった、松平は奥の部屋へと姿を消した。

正直言うと、洋輔はこの薬を飲むのに躊躇いがあった。市販といえども、他人から渡された薬はやはり飲む気にはなれなかった。

「ねえ、先生」

不意に、佳代は声をかけてきた。昼休みの時に声をかけてきた彼女とは思えないほど、その姿は憔悴しきっていた。

その様子に、洋輔はかすかな違和感を抱いていた。

「私……どうしたらいいのかな？」

佳代が何を言っているのか、意味が分からず洋輔が顔をしかめていると、勢いよく保健室のドアが開いた。

ドアのほうへ振り向くと、そこには息を切らした男子生徒が立っていた。

「佳代！」

男子生徒は佳代の名前を叫び、堂々とした足取りで保健室へと入ってきた。

真ん中へ来た辺りで、男子生徒はようやく洋輔の存在に気づいたらしく、嫌悪感を露にしたが、それでも佳代のほうへと近づいて行った。

「何よ」

佳代は今にも泣き出しそうな顔をしている。声も震えていた。

「ここに入ったところを見て、来たんだ」

そう言うと、男子生徒は佳代の腕を掴み無理やり連れて行くこととした。

「ちょっと、何よ!」

佳代は激しく抵抗したが、男子生徒の力には太刀打ちすることが

出来なかった。

「俺と一緒に来るんだ！」

「離して！」

「ちよつと、君」

見かねた洋輔は、男子生徒のもとへ行き佳代から引き離れた。

「何すんだよ、おっさん」

「おっさん、つて」

俺はまだ二十一だぞ、という言葉が喉まで出掛かったが、ぐっと堪えて大人な対応を心がけた。

「彼女嫌がつているぞ」

「俺にはそう見えないね」

この自惚れている男子生徒を、思いつき罵ってやりたいという衝動を何とか抑え、無感情で洋輔は言った。

「君は彼女のなんなんだ？」

「どういう意味だよ、それ？」

男子生徒は食って掛かってきた。

「お前、佳代の彼氏気取りか？」

宝徳学園の生徒とは思えないほど、男子生徒の気性は荒く幼稚だ、洋輔はそう思った。相手にするだけ、時間の無駄かもしれない。

「俺はな、佳代の」

「赤の他人だよ、こいつ」

男子生徒の言葉を遮り、佳代は驚くほど冷たい声で答えた。

「な、何？」

「うっさい、本城」

変わらぬ冷たい口調で、佳代は本城と言う男子生徒に、突き放すように言った。

「本城つて……」

動揺を、本城は隠そうとしなかった。察するに、冷たくされたのが驚きだったのだろう。

洋輔は、本城と佳代の関係性がつかめなかった。

「なあ、お前」

「止めて！」

無理やり引き寄せようとする本城の手を、佳代は叫びながら振り払った。その時、ポケットから丸められた一枚の紙が落ちてきた。

「それ……」

本城が拾おうとすると、佳代は覆いかぶさるようにして紙を拾った。

紙を入っていたポケットにしまい、佳代は立ち上がって洋輔のほうへ顔を向けた。

「じゃあね、先生」

小さい声で言うと、目を伏せながら佳代は保健室を出て行った。

本城は手を伸ばして佳代を止めようとしたが間に合わず、がっくりと肩を落とした。

「くそっ！」

悪態をついて、本城は洋輔のほうへ顔を向けた。

その表情は何か言いたげであったが、結局何も言わないで保健室を出て行った。その後姿は、どこか寂しげであった。

佳代と本城は付き合っていたのだろうか。しかし、佳代は本城に対して、理由は分からないが怒りを抱いていた。赤の他人だと、佳代は躊躇うことなく洋輔に言っていた。

解せないことはたくさんあるが、今は関係ないだろう、そう自分に言い聞かせ、洋輔は座っていた椅子のほうへ体を向けると、視界にコップを持っている松平の姿が映った。

「あ、先生。見ていたんですか？」

意味ありげな微笑を浮かべながら、松平は洋輔に近づいてくる。「邪魔しちゃ悪いと思ってるね」

洋輔は、その言葉の意味を理解するのに時間はかからなかった。

「二人は付き合っているんですか？」

興味なさそうに素っ気なく訊いたが、内心では知りたくて仕方がなかった。

「いや、違つと思つよ」

松平の答え方も素つ気無かつた。

「違つんですか？」

「多分ね」

思わず聞き返してしまつた洋輔に、松平は訝しげな眼差しを向けた。

「いや、ほら、なんかそんな雰囲気があつたから」

慌てる洋輔に、松平はにやけながらコップを差し出した。

「よかつたな」

「何がですか？」

松平が何を思つてよかつたと言つたのか、本当は洋輔自身も分かつていたはずだ。けど、それを認めたくない自分がいた。

「佳代ちゃん、男友達いるからなあ」

聞き流そうとしたが、無理だつた。

「さっきの彼、ええつと……そうだ、本城君とも仲いいし、それと誰だつたかな、凄い頭のいい子……やつぱ思い出せないわ」

無理に思い出そうとして頭を悩ませている松平を尻目に、洋輔は佳代のことを思い浮かべため息をついた。所詮、自分と佳代は、教育実習生と生徒の関係なのだろうと。

「そついえば、君は佳代ちゃんと仲がいいのかい？」

「え？」

思わず声をあげてしまったのは、心の奥に秘めているものを松平に見透かされたからだと思つたからだ。

しかしすぐそれを打ち消し、松平の質問に答える。

「まあ、仲いいかは分からないですけど、彼女のほうから声をかけてきてくれて、少し話したんです」

「なるほどな」

どうやら、松平は納得の様子だつた。

「この学園では珍しいくらい、明るい子だ」

松平の言つとおり、彼女の明るさはこの学園に似つかわしくなか

った。実際、洋輔は教育実習生として今日、この学園を訪れてから生徒たちが仲良くお喋りをしている風景を見ていない。皆、人と接することを嫌い勉強ばかりをしていた。正直、洋輔はうんざりしていた。せめて楽しく、教育実習をしたかったのだ。そう思っていた矢先に、彼女と出会った。洋輔は少し救われた気がした。

佳代に特別な感情を抱いていることは、言うまでもないだろう。だが、洋輔はそれを決して認めはしなかった。そんな不純な動機から、教師になったと思われたくないからだった。

「保健室にも、前は時折顔を見せてくれる程度だったが、最近はよく来てくれてね。私の話し相手になってくれていているんだよ」

頷きながら、洋輔は松平にかすかな嫉妬を感じていることに気づき、自分を叱咤した。

「けど、彼女の様子少し変じゃなかった？」

「変ですか？」

佳代の普段をあまり知らない洋輔に言われても、答えられるわけがなかった。まさか松平は、自分の気持ちを知ってわざとこのような質問をぶつけたのではないか、そのような疑いを洋輔は向けた。

私は、普段の彼女のことを知っているよ。

松平の目は、そう言っているような気がした。

「なんか、いつもと違うような」

やっぱりだ。洋輔は冷ややかな気持ちで松平を見つめた。

「けどさあ、普通人が死んだくらいであんな泣くかねえ」

「さあ」

洋輔は素っ気無く返し、さっさと薬を飲んでこの保健室を出て行くとした。

一錠の錠剤を口に含み、水でそれを無理やり体の中に流し込む。松平はその動作に目をくれず、なにやら腑に落ちない点をあげているようだった。

「なんであんなに泣くのかな。やっぱり死体を見ると、悲しいのか。彼女だったら、泣くのか。けど……」

コップをテーブルに置いて、保健室を出て行く準備を始めると、松平は声をかけてきた。

「ねえ、やっぱり佳代ちゃんに限らず、普通の女の子であればシヨツクで泣くのかな？」

佳代に限らずというのと、松平の目がいつそう真剣になったので、洋輔は少し答える気分になった。

「そう言われると、そうですね」

洋輔は、死体を見ていた時の生徒たちを、脳裏に思い浮かべていた。

死体を囲んでいた生徒たちは狼狽を浮かべていたが、涙を流している者はほとんどいなかった。女子は、何人か嗚咽を漏らしていたが、佳代みたいに号泣している者はいなかった。

あれが彼女だといわれればそれまでだが、普通に考えれば、誰か分からない死体を見ただけで目を赤くするほど泣く者はいない。

「私の、気にしすぎかもしれないけどね」

そう言って、松平は重くなった空気を和ますかのように笑いながら言った。つられて、洋輔も笑った。

けど、心中は穏やかじゃなかった。

松平のおかげで、佳代という女の子のことをもっと知りたくなっってしまった。

その中には好意というものもあるが、それだけじゃない。松平が口にした疑問が、洋輔の中でも引っかかっていた。

「薬、ありがとうございます」

ここで長く考えていても仕方がない。洋輔はお礼を言って、足早に保健室を出て行った。

見送ると、松平は静かになった保健室を見渡し、そして佳代たちが来る前までやっていた実験を再開するため、奥の部屋へと消えた。

第三章

現場にいた者たちは、警視庁からやってきた刑事たちによって食堂に集められていた。集められた生徒たちは、こんな状況にも関わらず勉強に励んでいる。

食堂は第三校舎の二階にあり、全校生徒が食事をできるようにかなり広く設計されていて、お互いが向き合う形で作られた、百人座れる長テーブルが縦に六列並べられている。集められたのは三十人で、一つの長テーブルに間隔を空けて座らされていた。

洋輔は貧乏ゆすりをしながら、腕時計に目を落とした。

時刻は、六時を回っていた。集められてからすでに一時間近く経過しているが、それきり刑事たちは食堂に姿を現さない。色々と調べることがあるのだらうと、洋輔は無理やり自分を納得させようとしたが、一向に収まることのない吐き気と若干の眠気がそれを妨げていた。

松平からもらった薬を飲んでも吐き気は収まらず、むしろ飲む前よりも悪化しているように感じ、さらに眠気も襲ってきているのだ。市販だからといって、やはり他人からもらった薬は飲むものではないかと、洋輔は学んだ。

洋輔は背もたれに背中をうずめると、長テーブルを見渡した。

食堂に集められてから、時間がもつたいないとばかりに集められた生徒達が勉強をしている。

この状況で、よく勉強してられるよな。
。 。
軽蔑の眼差しを向け、胸中で洋輔は呟いた。

不意に佳代のが心配になった洋輔は、一番奥のほうへ座っている佳代のほうへ顔を向けた。両手で顔を覆い、リズムよく肩を動かしている。佳代が負った心の傷は相当深いようだった。

と、ここで洋輔は松平に言われた一言を思い出した。

佳代の様子が変わではないかと、松平は指摘していた。確かにその言葉には、納得のいくところがあった。

あの死体を見てから、彼女はずっと泣き続けていた。何に對して泣いているのか、洋輔にはもはや分からなかった。

死体を見たショックから泣いているのか、それとも……。

「皆様、お待たせしました」

六時三十分　ようやく、二人の刑事が警察手帳を掲げながら食堂に姿を現した。

「警視庁捜査一課の、館林と申します」

「同じく警視庁捜査一課の、海藤と申します」

館林と名乗った男は、いかにもベテランという風格を漂わしていた。素人の洋輔にも、只者ではないと分かる。短髪で、端正な顔立ちをしている館林は、実年齢よりも若々しく見えた。

一方の海藤という男は、少々肥満気味で、スーツを身軽に着こなしている館林とは違い、ラフな格好をしていた。それが、洋輔に不快な印象を与えた。

「すみません。調べたいことがたくさんあって、時間がかかってしまいました」

「調べたいことって、あれは自殺じゃないのですか？」

一人の男子生徒が、勉強している手を止め拳手をして発言した。

「ええ。その可能性は大きいと思います」

にこやかな表情で、館林は答えた。

洋輔は再度、佳代のほうに視線を向けた。依然として佳代は、両手に顔をうずめたままだった。

おそらく館林たちは、死体についての情報を自分たちに話すだろう。佳代は、その情報を聞くのが辛いはずだ。これ以上、佳代の泣いている姿は見たくない。

そう思い立ち上がった洋輔は、抗議するため館林のほうへ顔を向けて言った。

「これ以上、僕たちを拘束しないでください」

「はい？」

腹の底から声を出したつもりであったが、死体を見た時からの吐き気のせいで、上手く声に出すことが出来なかった。

仕舞いには、その場に倒れてしまった。

「大丈夫ですか！」

海藤が、その巨体を揺らして洋輔に近づいてくる。館林も、心配そうな眼差しを洋輔に向けている。

「館林さん、凄い熱です」

海藤は、洋輔の額に手を当ててから言った。

「どうしたんだ」

先ほどまで静寂に包まれていた食堂は、一気にざわつき始めた。周りの生徒たちは、口々に何か呟いている。

「どうしましたか？」

館林は洋輔のそばまで行くと、洋輔の頬にそつと手を当てて、すぐ離れた。

「病院に連絡だ」

いよいよ大事になってきた。海藤はポケットから携帯を取り出し、病院へ連絡を入れた。館林は、動揺する生徒たちを落ち着かせる役目に徹していた。

「大丈夫です。きっと、助かります」

数十分経った頃にサイレンの音が遠くから聞こえてきた。サイレンの音を聞いて、洋輔は薄れ行く意識の中、ようやく事態を把握し、胸中で呟いた。

俺、運ばれるんだ。

目を覚ますと、病院独特の香りが鼻につき思わず顔をしかめた。大人になっても、この匂いには慣れないなど、洋輔は心の中で自嘲した。

しばらく朦朧としていた意識だが、徐々にはっきりとしてきて、やがて両腕に激痛を感じるようになった。

激痛の正体を確かめるため両腕を上げようとすると、右腕が何かに引っかかり動かすことが出来なかった。

顔を右に向けると、包帯を巻かれた腕に点滴がさしてあった。同じく左腕にも包帯が巻かれていて、洋輔の不安は煽られるばかりだった。

色々この状況について聞きたいことが山ほどあったが、あいにくここは個室で、周りには誰もいないため、知ることは出来なかった。

それにしても、何故自分は病院に運ばれたのだろうか。その疑問が、真つ先に脳裏をよぎる。

普通に考えればおかしかった。死体を見て気持ち悪くなって倒れたとはいえ、病院に搬送され、両腕に包帯を巻かれて点滴がさされているという状況になるはずがなかったからだ。

今思えば、体調が急激に悪化したのは保健室を出てからである。

保健室にいた時、自分の身に何かあったのだ。

病院に搬送される理由を決定付けた、何かが。

「目が覚めましたか」

思案する間もなく、病室に二人の男が入ってきた。警視庁からやってきた、館林と海藤だった。

「随分、苦しそうですね」

洋輔のこの状態を見て、海藤はそう発した。口調には、デリカシの欠片も込められていなかった。

隣の館林のほうへ目をやると、まるで洋輔の姿など目に入っていないようで、思索にふけっているように見えた。

「しかし、驚きました。いきなり倒れたんですもん」

洋輔は、海藤という男にあまりいい印象は持っていなかった。口調といい、その格好といい、腹立たしさが湧いてくる。が、当然そのようなことは口に出せず、代わりに目で訴えていた。

海藤はそれに気づく様子もなく、べらべらと喋り始めた。

「瀬郷洋輔さんでしたっけ。聞きましたよ、職員の方から。あな

たはあの城東大学に通っているんですけどね。なかなか優秀じゃないですか。まあ、優秀じゃなければ宝徳学園の教育実習生なんて務まらないですもんね。本当、すごいです。けど、ついていませんよね。初日からこんな事件が起きちゃ。大学に戻ることになっちゃうんですかね」

我慢できなくて、助けてもらうつもりで館林へ視線を向けた。

しかし館林は全く気づかず、依然として考えを巡らせているようだった。

館林にとって何か引つかることでもあるのだろうか、そう思い始めた洋輔の耳には、最早海藤の言葉など耳に入ってこなかった。

「僕も教師になりたいと思った時期はあったんですけど、高校二年生のときに転機が訪れましてね。警察官に助けもらったことがあるんですよ。落し物を届けてくれたんです。警察官って意外といい仕事なのかもな、って思い始めて、そしたら決断するまで早かったですね。大学への進学も当時は考えていたんですけど、僕は警察官になろうと思って」

「ちよつといいですか？」

館林は強引に話を遮り、洋輔のほうへ顔を向けた。海藤は話を邪魔されたことへの不快感を隠そうとはしなかった。

「すみません、お疲れのところ。状況を軽く説明してから、一つ質問をさせてください」

海藤の話を永遠されるよりかは、館林の質問を受けていたほうがはるかにまじだった。

「医師の方に無理を言っただけをさせてもらっている状況なんで、手短にすませますね」

館林の言い方には、暗に海藤への非難が込められていた。

「この三日間で分かったことが一杯あるんですよ」

「三日間？」

洋輔は思わず聞き返した。

「三日間も僕は眠っていたんですか？」

「まあ、そう……なるんですかね」

齒切れの悪い返答に、洋輔は首を傾げた。

「非常に危険な状態だったと、担当の医師から聞かされました」
脱力してしまった洋輔を尻目に、館林は続けた。

「あなたは第三校舎にいたそうですね」

力なく、洋輔は頷いた。

「中庭に向かった際、誰かと会いませんでしたか？」

「誰か？」

館林の質問の意図が分からず、洋輔は首を傾げて呟いた。

「とくに誰も見ませんでしたけど……」

と、ここで洋輔はようやく館林の考えに気づいた。あの思案顔も、これで合点がいく。

「もしかして館林さんは、これを自殺じゃないと考えているのですか？」

洋輔の鋭さに館林は少なからず動揺を見せたものの、刑事というだけあってすぐに立て直した。

「詳しいことはお話できません」

本心から発せられた言葉だった。これ以上は、いくら粘ってもきつと話してくれないだろうと、洋輔は潔く諦めた。

「目が覚めたとはいえ、まだ絶対安静なんですから。また後日、お伺いします。その際、他の方々に提示した情報はお話します。それと、あなたの身に何が起こったのかも」

そんなことを言われても、落ち着いて眠れそうになかった。この三日間、何があったのか。何故警察は他殺の可能性も視野に入れているのか。

きつと、自分以外の現場にいたものはある程度の情報は聞かされているのだろう。高熱で倒れさえしなければ、こんなもどかしい気分など抱かなくてもすんだのにと、洋輔は後悔していた。

「それでは、また。お大事に」

言っと、館林は足早に病室を去っていった。海藤は、さきほど話

を遮られたのをまだ根に持っているのか、不機嫌さを露にして館林の後に続いた。

洋輔は枕に頭を押し付けて、ゆっくりと瞼を閉じ、これからのことを頭に思い浮かべた。

当然だが、教育実習は中止になるだろう。生徒の自殺騒動が起り、その上高熱で倒れてしまい、教育実習どころではなくなってしまった。数カ月後には、平凡な大学生活を再開しているに違いない。そう思うと、気が滅入ってくる。

一度でいいから、生徒たちに授業してみたかったな。

洋輔は、胸中で呟いた。

悔しかった。何も出来ないのが非常に悔しくて、情けなかった。

けど、どうすればいい。宝徳学園はおそらく休校になり、洋輔は大学へ戻ることを余儀なくされる。

自嘲気味に、洋輔は笑った。

どうしようもないじゃないか。

保健室で何があったのか考えるのを忘れ、洋輔は悔しさのあまり声を押し殺して涙を流した。

第四章

数日後、洋輔は順調に回復していき、包帯もとれて自力で歩けるようにまでなった。

「よかったですね、瀬郷さん。あともう少しすれば、退院できますよ」

早朝、洋輔の病室にやってきた担当医師の長谷川は、快活な笑顔を浮かべて言った。

「もう少し時間かかると思っていたんですけどね」

長谷川の口調は、本心から喜んでるように感じられた。それが、洋輔にとっては嬉しいことだった。

長谷川は医師になって日は浅いが、それ故に患者のことを一途に思える、汚れていない純粹な心を持っていた。年もそれほど離れていないため、洋輔は長谷川という医師に対して親近感を抱いていた。「本当にありがとうございます」

洋輔も、本心からお礼を言った。

「いえいえ。けど油断しないでくださいね。まだ退院ではないんですから」

長谷川の釘を刺すような言い方も、洋輔は許せていた。

「じゃあ、長谷川先生。そろそろ教えてくれますよね」

洋輔がそう切り出すと、途端に長谷川の表情は曇り始めた。

「そう……ですか」

狼狽を露にして、長谷川は狭い病室を見回している。

「駄目ですか？」

今日こそ引き出してやると、洋輔は心に固く誓っていた。

退院が間近に迫っているのだ。訊くチャンスは、もう残りわずかだ。教えてくれないというのなら、いくら相手が長谷川でも暴れてやる覚悟でいた。

「分かりました。隠していても仕方ないことですし」

ようやく長谷川は、洋輔に話す覚悟を決めた。ずっと粘った甲斐があったと、洋輔は胸中で呟いた。

数日前、刑事たちがここを訪れてから洋輔にはずっと引つかかっていたことがあった。

自分の両腕に巻かれている包帯は、一体何なのか。

食堂で、気分が悪くなり倒れたというところまでは覚えていたが、それ以後の記憶は全くないのだ。倒れただけで腕に包帯が巻かれたとも考えられない。ということはつまり、寝ている間に何かあった、もしくは無意識のうちになにかしていたということになるのだ。

それが分かれば、大分原因を絞り込めるはずだ。

それらのことについて、洋輔は毎朝、長谷川が病室にくるなり訊いていた。しかし長谷川は答えようとせず、ずっとはぐらかしてきただのだ。

今になって、長谷川はその質問に答えてくれようとしている。退院が間近に迫っているので、喋ってくれる気にもなってくれたのだろう。

「僕からはあまり言いたくなかったんで、ずっと隠してきたんですが。まあ今日、刑事さんもお見えになるそうなんで、どうせ知るようになるでしょうから僕からご説明します」

刑事がやってくるというのは、初耳だった。そのことも、洋輔を動揺させないための親切心から隠していたのだろう。

「まず一つ、お聞きしたいことがあるんですが、いいですか？」

「はい」

洋輔は、並々ならぬ緊張感を感じ取って、思わず生唾を飲み込んだ。長谷川の表情には、いつも浮かべている笑顔はなかった。

「単刀直入に窺います。倒れた当日、何か変なものでも口にしましたか？」

「変な物？」

瞬時に、養護教諭の松平からもらったあの薬を思い浮かべた。

「変な物っていうか……強いて言うなら、薬ですかね」

「薬？」

「ええ。僕、自殺死体を見たときに気分が悪くなっちゃって、保健室へ行っただんです。そしたら、養護教諭の松平先生が薬をくれて」「どのような薬ですか？」

「吐き気を抑えるための薬、って言っていました」

洋輔は、他人から受け取った薬を飲むかどうか最後まで悩んだが、松平の厚意を無下にすることもできず、結局飲んでしまった。

予感があったが、やはりあの薬がいけなかったというのか。

「他人から、薬を受け取って飲んだと言うのですか？」

長谷川は咎める口調で言った。

「いや、僕も最後まで悩んだんですけど……」

言い訳をしようとしたが、途中で言葉に詰まってしまった。

つまり、こうなったのも全て悪いのは自分なのだ。言い訳を並べても仕方ない。

「そうですね」

長谷川の目は険しかったが、洋輔をこれ以上責めるつもりはないようだ。長谷川の関心は、すでに別のほうへあった。

「あの、どうかしました？」

重苦しい沈黙に耐え切れなくなった洋輔は、長谷川の目を覗いて言った。

「……けど、ありえない……」

深刻な顔をして、長谷川は一人で思案していた。時折聞こえてくる長谷川の呟きの意味を、洋輔は知りたくて仕方なかった。

「……薬は、関係ないのか……」

数分、長谷川は頭の中で推理を展開していたが、自分なりに納得したのか、二三度頷いてから別の話題を洋輔にふってきた。

「巻かれていた包帯について、お話ししよう」

長谷川は、以前包帯が巻かれていた洋輔の両腕に目を落とし、言った。

「どうして包帯が巻かれているのか、理由を説明されなかったから、

気になったことでしょう」

「誰も説明してくれないんですもん」

ふてくされたように、洋輔は言った。

「ええ。言わないほうがいいという、我々の配慮です」

どつりで誰も教えてくれなかったわけだと、洋輔は一人納得した。

「それじゃあ、この包帯は？」

ついに疑問が解消される喜びと、実はそれを知るのが怖いという不安が入り混じり、洋輔は複雑な心境で恐る恐る問うた。

「暴れたんですよ、瀬郷さん」

「暴れた？」

言葉の意味が解せなくて、思わず洋輔は訊きかえした。

「暴れたって、どういうことですか？」

「瀬郷さんは意識不明の重態で、こちらに搬送されてきました。我々が診察している最中に目を覚まされて、急に暴れだしたんです」

長谷川は真剣な表情で話しているが、洋輔にはどうしても信じることが出来なかった。

「僕には暴れた時の記憶は一つもありません。無意識で暴れていた、って言うことなんですか？」

「そう考えるのが、自然でしょう」

洋輔は、まだ半信半疑な気持ちだった。

「瀬郷さんの両腕に巻かれている包帯も、暴れた際に怪我をしたためです」

言われて、洋輔は両腕に目を向けた。

確かに辻褄は合うが、それでも納得のいかない部分が洋輔にはあった。

「けど、今までにそんな症例あるんですか？」

「私が受け持った患者さんの中に、そのような人は一人もいませんでしたが、前例としては、薬物中毒者の方が突然暴れだすという…」

最後のほうは言葉を濁して、長谷川は言った。

「俺、薬物中毒者と一緒ですか？」

怒りを押し殺しながら、洋輔は言った。

「いえ、そんなことはありません」

慌てて、長谷川は否定した。

「診察した結果、瀬郷さんに薬物反応は出ませんでした。私は、あくまで前例をあげただけですので、瀬郷さんを薬物中毒者だなんて思っておりません」

必死に弁解する姿が、洋輔には滑稽に見えた。

「いいですよ、もう」

冷めた気持ちで言うと、洋輔は気持ちを紛らわすため、窓に映る景色に目をやった。中庭を一望できるこの個室を充てられたことは少なからず感謝していた。

「あれ？」

中庭をこの病棟に向かって歩いてくるスーツ姿の男が見えて、洋輔は思わず声を上げた。

「どうしました？」

長谷川は立ち上がって、窓の近くまで行き外へ目をやった。

「あ、刑事さんですね」

その口調には、どこか安堵した響きが込められていた。

「それじゃあ、私は刑事さんを迎えに行きますので。しばらくお待ちください」

「はい」

洋輔は刑事が見えなくなった中庭に目を向けながら、返事をした。後ろで、ドアが閉まる音が聞こえてきた。

「お待たせしました」

しばらくすると、長谷川の声とともにドアが開かれる音が聞こえてきた。振り返ると、長谷川の後ろに館林の姿が見受けられた。

「お久しぶりですね、瀬郷さん」

愛想よく館林は挨拶したが、その目は笑っていなかった。

「僕の代わりに説明してくださいね」

長谷川は館林に小声で言った。館林は頷きながら、横目で洋輔の姿を捉えていた。

「分かりました」

一言そう言うのと、館林は長谷川に退室を促した。それに従い、長谷川は足早に病室を後にした。

館林は人の笑顔を浮かべて、さきほどまで長谷川が座っていた椅子に腰を下ろした。

数分間、お互い無言のまま見詰め合っていたが、やがて館林が沈黙を破った。

「長谷川先生は、あなたに巻かれていた包帯のことを話しましたか？」

椅子に腰を下ろしながら、館林はゆっくりとした口調で言った。

「包帯は、僕が無意識のうちに暴れて、怪我したから巻かれたんですよね？」

確認を取る口調で、洋輔は言った。

「ええ。その通りです」

「僕が暴れた原因というのは？」

「それはまだ、はっきりと分かっていません」

館林の口調からして、何か隠しているとは思えなかった。

「分かりました」

半ば失望するような気持ちで、洋輔は言った。

「けど、私が今日訪れたのは、そのような話をするためではありません」

刑事の言葉に興味を惹かれ、洋輔は館林のほうを見た。

「事件の説明です」

途端に、洋輔の動機が激しくなった。

「あなたも知っておかなければならない。学園の生徒が飛び降りた事件のことを」

そのことはずっと知りたかった。しかし、この病室にはテレビがなく、出歩いてテレビのある待合室に赴いても事件のことはすでに

報道されていないのだ。新聞も読まないため、事件の知識は皆無だった。

まさか、刑事から直接話を聞けるとは。洋輔にとって願ってもないことだった。

「最初から、説明しますね」

洋輔は、館林の言葉に身を乗り出して頷いた。

第五章

「自殺したのは、宝徳学園の三年生、姫島良助、十八歳です」

館林はスーツの内ポケットから手帳を取り出し、付箋の張つてあるページを開いて読み上げた。

「両親は小学校六年生の頃に他界し、今は親戚に引き取られているそうです」

姫島の紹介を終え、ここから話はいよいよ事件に入った。

「食堂に集めた人たちの事情聴取から、姫島君が飛び降りたのは大體午後四時二十分頃だと決定されました」

「確かにその頃です。肉の潰れる音を聞いたの」

すかさず、洋輔は言った。

「なるほど。その頃、あなたは第三校舎にいた。何故ですか？」

館林は探るような目つきで洋輔を見つめ、質問した。こんな質問されるとは思っておらず、洋輔は動揺した。

生徒の学力が想像以上に高かったから図書室で勉強をしていますと、正直に答えることに躊躇いがあった。洋輔にだって、羞恥心ぐらいある。

しかし、答えなければ館林の追求は激しさを増すだろう。これを自殺とは考えていないことを、館林は仄めかしていた。つまり、屋上のある第三校舎にいた洋輔を、疑っているのだ。

早く容疑者候補から抜け出すため、洋輔は正直に答えた。

「授業を見学していて、自分の学力の低さを自覚したんです。それで、図書室で勉強をしていました」

顔が熱くなるのを、洋輔は感じた。

「そうですか」

そう言つて頷くと、洋輔のしかめ面を見て館林は続けた。

「あ、大丈夫ですよ。別に瀬郷さんを疑っているわけではありません

ん。質問をしたのは、建前ですよ。それに、瀬郷さんが図書室にいたという事実も確認がとれていますんで」

何か言われる前に、疑っていないということ館林は洋輔に分からせた。

「ですので、安心してください」

洋輔はただ、正直に答えたのが恥ずかしく顔をしかめただけで、館林が自分を疑っているかどうかは、仕方がないことだと、割り切っていた。

「でも、刑事さんはこれを自殺ではないと考えていらっしやるんですよね」

洋輔がそう口にした途端に、館林は穏やかな表情を崩し、口を固く結んだ。その表情からは、自分が言い過ぎたことを反省しているようにも見えた。

「そう思える根拠を教えてください」

きつい口調で、洋輔は言った。納得のいく答えが相手から吐き出されるまで、引き下がらない覚悟だった。

「そうですね」

ゆっくりと息を吐き出しながら館林は言っつて、後ろの出入り口のほうをちらちらと気にしだした。誰か来るのを警戒しているのだろう。

「あなたのおっしゃる通り、私は自殺ではないと考えています。自殺と見せかけた、他殺だと」

洋輔の目をしっかりと見つめ、館林は小声で答えた。

「分かりました。お話しします」

いよいよ教えてくれるのかと期待を抱いたが、館林の鋭い目つきが突き刺さり、洋輔は一旦落ち着いた。

「ただし、条件があります」

「条件？」

「ええ。ただでは教えられません」

刑事が大学生に何を求めるのだろうか、少々不信感を抱いて洋

輔は耳を傾けた。

「これ以上のことを教える代わりに、あなたには私の捜査に協力していただきます」

洋輔は耳を疑った。

「この事件は、捜査は事実上打ち切られています。何故なら、自殺だと断定されたからです」

状況的に見て、それが妥当な考えであることは素人にも分かる。

この男以外、皆自殺だと考え、疑っていないはずだ。

なら何故、この男は他殺にこだわるのだろうか。洋輔は、疑問に思った。

「自殺だと断定された理由は、遺書があったからなんです」

「遺書？」

「ええ。彼の学ランの、内ポケットの中に」

それは、自殺を決定付ける十分な証拠だった。

「遺書が残されていたんじゃ、自殺じゃないですか？」

もっともな意見を言ったつもりだったが、それに対しての反論を館林は用意してきたみたいだった。

「遺書は全てワープロ書きでした。つまり、誰でも用意できるということです」

ワープロであれば、本人が書いたかどうか確かめることが出来ず、誰でも簡単に用意することが出来る。館林が自殺だと考えていない理由の一つは、それだった。わざわざ遺書をワープロで書くのはおかしい。

洋輔の思考回路に、『他殺』という二文字が加わえられた。

「それともう一つ、あるんです」

洋輔は、言葉を待った。

「仮に、遺書は本人が作成したものとしましょう。けど、文面が納得いかないんです」

「文面、ですか」

「はい」

館林の自信満々な口調に、洋輔は期待を抱かずにはいられなかった。

「彼は、宝徳学園一の秀才なんです。十年ぶりに、宝徳学園が特待生として彼を迎えたわけですから。テストでは、常に学年トップ。全国模試の順位も、上位をキープしています。もちろん成績もトップですから、進路は選び放題です」

自殺した姫島がいかに優秀だったかということを行い終え、館林は手帳に目を落とし、遺書の文面を読み上げた。

「もう限界です。受験のプレッシャーに押しつぶされました。僕は、自分の身を投げます」と、遺書に書かれていました」

ここまで聞くと、館林が主張する他殺説にも共感できた。

確かに妙な話だ。成績が常にトップであれば、指定校推薦などで大学は選り放題のはずだ。一般入試を受けるにしても、姫島の学力をもってすればどの大学も問題はないはず。姫島に、自殺する動機はないということになる。

だが、そう決め付けるのはまだ早い。これらはいくまで、館林や洋輔の推測だ。姫島は、本当に受験のプレッシャーを感じていたのかもしれない。そうなってくると、他殺説は通用しなくなってくる。「もちろん、これだけで断定は出来ませんが、十分可能性はあるのではないかと、私は考えております」

館林の自身溢れる口調に心を動かされ、いつしか洋輔は尊敬の眼差しを向けていた。

「一応、姫島君のクラスメイトに彼の人物像を聞いたところ、とくに情報を得られませんでした。やはり、宝徳学園の生徒はお互い干渉しあわないみたいですね」

彼らは、勉強しか興味がないのだ。学年トップが消えたことで、喜んでいられる者もいるかもしれない。洋輔は宝徳学園の生徒を、心の底から軽蔑していた。

あいつらは異常だよ。

現場付近にいた者たちが食堂に集められ待機していた時、誰も、

何事もなかったかのようにペンを走らせている光景は、異様だった。目を背けたくなった。

そんな中、佳代は、一人端のほうで自殺した生徒のことを思い、泣いていた。それを思い出すと、怒りを通り越して悔しさがこみ上げてくる。

「あなたの気持ち、お察しします」

慰める口調で館林は言うと、元気付けるように洋輔の背中を二三度、軽く叩いた。その優しさが、洋輔の感情を高ぶらせた。

「こう言つと保護者の方から怒られると思いますが、勉強ばかりする彼らは異常です。受験戦争に生き残るため、姫島君を殺害した可能性も否めない」

言い終えた館林に、洋輔は顔を向けた。

その時一瞬だけ、館林は偽善的な微笑を浮かべたが、洋輔は気づかなかつた。館林は味方であるという認識が、それを見過ごした。

「最後に一つ。他殺の可能性があるとすれば、これが重要な鍵となつてきます」

一層、館林の口調に力が込められた。

「死体解剖の結果、姫島君の体内から微量の薬物が発見されました」
「姫島君は、薬物中毒者だったということですか？」

「いえ、そういうわけではないと思います」

即座に否定すると、再び手帳に目を落としてメモを読み上げた。

「彼の体内から発見されたのは、微量の薬です。覚せい剤の類ではないということは、検査で証明されています」

「じゃあ一体、何の薬なんですか？」

「それが分かれば、苦労しないんですけどね」

ため息交じりに発したその言葉は、洋輔を失望させた。その薬が、この事件の鍵を握っているというのは、過言でもないようだった。

「念のため、彼の身を引き取った親戚に話を聞いたところ、通院はしていないそうです」

「医者から処方された薬ではないということですか」

「そういうことになりませぬ」

洋輔の中で、ますます他殺の線が濃厚となってきたが、ふと疑問がよぎった。

怪しい材料は十分存在するのに、何故館林以外の刑事はこれを自殺だと断定したのだろうか。

「他の刑事たちは、神経を麻痺させる何らかの薬だと解釈したみたいですよ」

館林は、洋輔の疑問を見透かした上で答えた。

「自殺する前は、誰でも怖いんです。その怖さを紛らわすために、神経を麻痺させる薬を飲んだと決め付け、他の刑事たちは片付けてしまいました」

「けどそれって、なんだかこじつけみたいな感じがします」

納得がいかない。怪しいものがあれば、それを徹底的に追求するのが警察だろうという考えが、洋輔の中にはあった。

「警察という組織は、そういうものです。よほどの証拠がない限り、動くことはしません。せめて、薬さえ分かれば事態は大きく変わるんですけどね」

「どうしても、薬の種類は分からないんですか？」

半ば警察を責めるような気持ちで訊いたが、館林はただ黙ってうなだれるだけだった。その反応を見て、洋輔は深いため息をつき、窓の外へ目をやった。

沈黙がしばし病室を支配したが、やがて館林は口を開いた。

「言い訳のように聞こえるかもしれませんが、体内から発見された薬が微量だったせいもあるのです」

洋輔はまだ、窓のほうへ目を向けている。それでも、館林は続けた。

「それと、その薬が見たことのあるものであったら、たとえ微量でも正体をつかめたはずなのです」

ようやく興味を示し、洋輔は振り向いた。

「どうということですか？」

「言葉の通り、見たことのない薬なのです。もう少し量が多ければ、どのような効力をもつ薬か、ある程度の調べはついたのでしょうか」
見たこともない薬というのは、一体どういうことなのか。重要視せねばならない問題だった。

「死体解剖した解剖医の話によると、患者に与えるような薬ではないとのことですよ」

すでに頭は混乱を極めていた。何故そのような薬が姫島の体内から検出されたのか。自ら服用したとは考えられない。犯人はその薬を飲ませ、姫島が十分弱ったところで屋上から投げたのか。

「それ以外にも、興味深い話があるんです」
身を乗り出して、館林は言ってきた。

「姫島君の右腕に、痣を見つけたそうです」
「痣？」

洋輔は聞き返した。

「ええ。他の部分はほとんど壊滅状態だったんですが、右腕はまだましな状態で残っていたそうです。その右腕に、痣が浮き出ていたみたいなんです」

「けど、転んで打ったとかじゃないんですか？」

「調べた限りでは、出来てまだ時間が経過していない痣なんだそうです」

力強く言う館林に圧倒されながらも、洋輔は反論した。

「その痣は、きっと関係ないですよ」

「そうかもしれないし、事件の謎を解く重要なヒントになる可能性もある」

適当に頷き、洋輔は流した。どう考えても、痣が関係あるとは思えないのだ。逆に、痣をキーワードに加えて事件の推理を展開すると、そればかりにとらわれて、答えに辿り着けない気が洋輔はしていた。

「姫島君の体内から見つかった薬が睡眠薬の類だとして、犯人は暴行を加え、それを無理やり飲ませて屋上から落としたというのであ

れば、一応は納得できます」

館林の推理を、洋輔は冷めた気持ちで聞いていた。

とにかく今、重要視せねばならないのは姫島の体内から発見された微量の薬の正体だった。いくら薬についての仮説を提示しても、薬の正体が分からなければ仮説のまま終わってしまう。何とか薬の正体を突き止めることが、課題のようだった。

「とりあえず、今までの話を整理すると……」

一通り情報を得たところで、洋輔は一旦これまでの話をまとめることにした。

「死んだのは、宝徳学園の三年生、姫島良助。日時は十月二十日の午後四時二十分ごろ。屋上から飛び降りたと。屋上には遺書が残されていた」

遺書の内容を忘れてしまった洋輔は、隣で耳を傾けている館林に一瞥をくれた。察して、館林は手帳に目を落とし、内容を読み上げた。

「もう限界です。受験のプレッシャーに潰されました。僕は自分の身を投げます　そう書いてありましたが、ワープロ作成なので偽造可能です」

「はい。ここで、他殺の可能性も視野に入ってきます」

言い終えると、洋輔は間を置いてから続きを話し始めた。

「けど、彼は学園一の秀才です。宝徳学園は指定校だったたくさんありますし、大学は選び放題なのです。一般入試を受けるにしても、敵なしでしょう。彼が受験という動機で自殺するとは、考えにくい。さらに、他殺説を匂わせるのが、姫島君の体内から見つかった薬です。けど、その薬の正体は分かっておらず、いくつかの想像は出来ませんが、言い始めたらきりがありません」

言い切って、館林の反応を窺った。

「大丈夫です。間違っていないですよ」

険しい表情を浮かべ、館林は言った。

「けど、ここからが問題ですね」

洋輔は腕を組んで、言った。

この事件の概要を言葉にしていくうちに、これからやろうとしていることがいかに困難か、洋輔は改めて痛感させられた。入り口すら、見えていない状態なのだ。

他殺だとしたら、彼を殺したのは学校関係者でほぼ間違いない。宝徳学園のセキュリティは厳しかったため、一般人が校内に入って、姫島を殺すことは不可能に近いと断言していいだろう。

学校関係者の中で、姫島を殺す動機を持つものは、何人か いや、大勢いるはずだ。

洋輔がそう考える理由は、生徒たちの、異常なまでの勉強に対する執着心を見せ付けられたからであった。

校内で生徒が自殺したというのに、時間が経ったら何事もなかったかのように勉強を再開したやつらだ。勉強に命をかけているといつても過言ではない。

いい大学に進むため、またはテストの順位を上げるために、学年トップである姫島を殺害しようと考えてる者は、いるのではないだろうか。

発想が飛躍しすぎているかもしれないが、しかしあながち的外れではない気がしていた。ここまでくると端から見ればただの偏見だったが、洋輔は自分の考えに自信を持っていた。

そしてこの考えは、おそらく館林も共感してくれるだろうという確信も抱いていた。

「私は、これが本当に他殺だとしたら犯人を許せません」

唐突に、館林は胸中の思いを口にした。

「この三日間、私は色々調べてきました。宝徳学園について、姫島君について、周りの生徒たちについて。得られたものはたくさんありました。そして、私なりの推理も出来上がりつつあります」

その言葉に、洋輔の期待はいっそう膨れ上がる。

「この推理が正しければ、解決の糸口が見えてきます」

館林は笑みを浮かべ、つられて洋輔も明るい気分になった。

刹那、脳裏にある違和感がよぎり、洋輔を困惑させた。

なんだろう、このもやもやした気持ちは。

表情は笑顔を浮かべまま、洋輔は今までのことを振り返り、必死に思考を巡らせた。

洋輔の脳裏によぎった違和感は、姫島の自殺に対しての、館林の必死さであった。

館林曰く、他の刑事たちはこの事件を自殺と断定しているらしいが、館林は他殺だと言い張り、大学生の洋輔に捜査協力を求めている。何故そこまで必死になれるのだろうか。

姫島良助の死は、不明な点がいくつかあるにしろ状況的にはほぼ自殺だと考えられる。彼の学ランの内ポケットには遺書が入っていた。ワープロで書かれていたが、深く考えることもない。館林の同僚たちも、これは自殺だと考えて、疑っていない。

それでも館林は他殺だと考え、一人で捜査をしようとしている。今日、洋輔に会うため、一人でこの病院を訪れたのが、固い決意の現れであった。

これら三つの違和感は、余計に洋輔を混乱に陥れた。思考能力は著しく低下していき、どちらの説が正しいのかもはや判断がつかないほどになっていった。

そして次第に、洋輔は信頼していた人物へ疑惑の目を向けていた。「どうしました？」

それを察した館林は、怪訝な表情を浮かべそう口にした。

「いや、べつに」

慌てて平静を装い、その場は何かごまかしたが、このままではいけないという危惧が、洋輔の中にはあった。

何か館林は重要なことを隠している　根拠はないが、洋輔はそう考えていた。

その考えが脳裏にあるから、洋輔は館林のことを百パーセント信用することができなかった。洋輔の思い違いで、隠し事などではないかもしれない。が、洋輔の直感はかなりの確率で当たるのだ。

だから今回も、自分を信じてみる。

館林はきつと、隠し事をしていると。

「私は、姫島君を殺した犯人を絶対に許さない」

少なくとも、その口調には偽りはなかった。それが、洋輔をさらに困惑させた。

「姫島君の輝かしい将来を奪った犯人が、憎いです」

どうしてそこまで感情移入ができるのか、洋輔は解せなかった。

姫島と館林には、なんらかの接点があるというのか。

もしかしたらそれが、館林の隠し事なのかもしれない。

姫島の小さい頃から親交があつたとしたら、真剣になれるのも頷ける。館林がそのことを隠している理由は、刑事としての自覚からであろう。私情に流されて捜査するということは、刑事として失格だ。故に隠している。同僚たちにも黙っている。洋輔は、そう解釈した。

「この事件を解決するために、私は恥を忍んでこの病室を訪れました。姫路君を殺した犯人を、どうしても捕まえたいのです」

プライドを捨て、たかが大学生に必死に訴える姿は、洋輔の心を動かした。そして、自分を協力者に選んでくれた館林に感謝さえしていた。さきほど抱いていた、館林に対しての疑惑は、徐々に頭の片隅へと追いやられていった。

「分かりました。一緒に、捜査をしましょう」

館林の手を取り、洋輔は言った。

「本当ですか？」

期待通りの答えを得られて、館林は満面の笑みを浮かべた。

最初こそあまり乗り気ではなかったが、話していくうちに、館林のことがもつと知りたくなり、この事件に隠された真実も見てみたくなった。

姫島が自殺ではなく他殺だとしたら、犯人は誰なのか。その動機は、一体何なのか。他にも、洋輔の興味を駆り立てる謎が山ほどあった。館林とともに、全ての謎を明らかにしたいという強い気持ち

が、洋輔にはあつた。

「大丈夫です。きつと、上手くいきます」

自分に言い聞かせるように、館林は言った。心のどこかで、館林も不安を抱えているのだろう。

「少し聞きたいことがあるんです」

これから館林と事件の捜査を行う上で、重要なことを洋輔は忘れていた。

「僕、教育実習生として宝徳学園に来たのですけれど、一体どうなるんでしょうか？」

自殺騒動が起き、学校はおそらく休校だろう。洋輔も、大学へ呼び戻されるに違いない。そうなった場合、捜査を行うのに支障をきたす。館林がどのように考えているのか、洋輔は知りたかった。

「そのことでしたら、大丈夫です」
考えはあるようだった。

「私これからあなたの大学と掛け合います。大学側も、了承してくれるでしょう」

「仮に了承してくれても、宝徳学園はどうなるんですか？ 休校でしょう」

「ええ」

即答なのに若干戸惑いつつ、洋輔は訊いた。

「だったら、捜査も何もないじゃないですか。どうやって、進めるんです？」

その質問の答えも予め用意していたらしく、返答に窮することなく館林は答えた。

「休校はあと四日で解かれます。それから、生徒などに話を聞くなどして、捜査を始めましょう」

館林の力強い口調により、洋輔は頷かざるを得なかった。

「一人の生徒が自殺したというのに、たった一週間だけ休校というのも、おかしな話ですよね」

急に声のトーンを落とし、深刻な顔つきで言った館林の姿は、ど

こか悲しげな様子だった。

姫島と小さな頃から親交があったという洋輔の解釈が正しければ、そのような姿も当てはまるのだろうが、想像と若干のずれが生じていることに、引つ掛かりを覚えた。

だが、そのずれを洋輔は上手く言葉にすることができなかった。「これを」

不意に館林が渡してきたのは、名刺だった。館林の肩書きと携帯番号、メールアドレスが書かれていた。

「あなたの携帯番号を、教えていただけますか？」

「あ、はい」

洋輔は記憶を頼りに、近くにあった紙に携帯番号を書き、それを館林に渡した。

満足そうに受け取ると、館林は立ち上がり、言った。

「今日中にも、あなたの大学へ電話をかけてみます。内容は、教育実習を続けさせてくれないだろうか、というものです。おそらく快諾していただけるでしょう」

自信に満ち溢れた言い方だった。この物怖じしない性格が、周りの人たちに好感を抱かせる。洋輔も、その内の一人だった。

「瀬郷さんの担当医師の話では、明日ぐらいには退院できるそうなので、大学側と話した内容については明日の夜ぐらいに、報告させていただきます」

退院できるという話は初耳だったが、気になっていたことは確かだったので知れたのは嬉しかった。

「分かりました。ありがとうございます」

深く頭を下げ、洋輔は感謝の意を示した。

それを見た館林も一礼をして病室を出て行った。

病室に沈黙が訪れ、途端に寂しさが募ってきた。館林を慕っている証拠だった。

一時は疑いも向けていたが、この短時間でよく館林を信頼できるようになったと、洋輔は不思議に思っていた。意外と人見知りのと

ころもあるのだ。

心を開きかけている自分に戸惑いを感じていたが、その反面、嬉しさもあった。館林という人物に出会えた事で、何か変われることが出来るかもしれないという期待を抱いていた。これから館林とは、徐々に心から信頼できる仲になりたいという願望が、洋輔の心に渦巻いていた。

「よし、がんばるか」

病院のベッドの上で、洋輔は気合を入れた。これから忙しくなることを覚悟し、横になって休息をとることにした。

時刻は午後の三時半をようやく回ったところで、まだ睡魔はなかったがそれでも寝なくてはいけないという強迫観念が洋輔を襲った。絶対に犯人を見つけ出してみせる。心の中で、固く誓っていた。もうすでに、洋輔はこの事件を他殺だと思い込み疑わなかった。

だが洋輔は、まだ知らなかった。

自分が挑もうとしている事件に隠された、恐るべき真実を。

第六章

翌日、洋輔は無事退院することが出来、早々に自宅のアパートへ帰宅した。館林からの電話をいつでも受けられるようにするためだ。洋輔が住むアパートは築五十年の、木造建てだった。家賃は、都内の平均を大きく下回るものだったが、親の仕送りとバイトで稼いだお金でも、必要最低限の生活を送るのがやっとというのが現状だった。

大学生になったら一人暮らしをしようと、高校三年の頃に漠然と抱いた。一月に入り、そのことを両親に告白すると、両親はとくに何も言わず、頷いた。それが何を意味するのか、想像にあまりある。中学二年生の頃に起こしてしまった傷害事件がきっかけで、両親との折り合いが悪くなってしまった。何度も謝り、どうにか穏便に事は済んだものの、傷害事件を起こしたという事実は拭いきれない。家の中でも不穏な空気が漂い始め、家族で交わされる言葉数も次第に少なくなっていく。

両親は、洋輔に家を出て行って欲しかったのだ。それをいち早く察した洋輔は、自ら申し出た。両親にとっては、願ってもないことだった。

自らの愚かさが招いた、結果だった。傷害事件さえ起こさなければ、もう少しよい方向へ進めていたかもしれない。

あの日から何度、後悔しただろう。自分の軽率な行動を呪った。しかし、いくら後悔しても相手にその気持ちは上手く伝わらず、残酷に時間だけが過ぎ去っていき、今の洋輔があった。

アパートに帰るたび、過去を振り返ってしまう自分を自嘲気味に笑って、テレビの上にあるデジタル時計に目をやった。時刻は正午をようやく回ったところだった。洋輔は落胆した。帰ってきてからまだ十分も経っていない。

館林の電話が待ち遠しい。大学側の対応が気になるところだった。その対応により、これから館林と捜査できるのかどうかが決まるのだ。ここまで来たら、なんとしても事件の真相を導き出したかった。部屋の中央に胡坐をかき、目の前に携帯を置いて、電話がかかってくるのをひたすら待つというのは、忍耐力のない洋輔にとっては酷なものだった。しかし、それ以外にやることが思いつかなかった。勉強する気も起きないし、食欲もない。事件のことが頭から離れず、洋輔を苦しめていた。

携帯を見つめて待つこと一時間、洋輔にとっては何時間も経った気がしたが、部屋中に大音量の着信が鳴り響き、洋輔は歓喜に満ち溢れた。思わず声が出てしまったほどだった。

「もしもし」

震える手で携帯を取り、通話ボタンを押して耳に画面を押し当てて言った。

「館林です」

通話口から、待ちに待った館林の声が聞こえてきた。洋輔は若干の安堵感を覚えた。

「ずっと待っていましたよ」

喜びのあまりそう口になると、館林の笑う声が聞こえてきた。

「昨日の夜、大学側と交渉した結果、あなたを宝徳学園の教育実習生としてまだ使ってもいいそうです」

「本当ですか？」

「ええ。宝徳学園側も、渋々ですが了承してくれました」

今のところ、計画は順調に進んでいるようだった。

「じゃあ、問題ないですね」

うきうきした口調で言うと、館林は唐突に黙した。何かまずいことでも言っただろうか、洋輔は不安に駆られた。捜査を始めようと張り切った矢先に、仲間割れでも起こったらたまったものじゃない。

しばらく嫌な沈黙が二人の間に流れたが、やがて館林は言った。

「言い忘れていましたが、私はあなたと捜査をすることはできません」

その意味を理解するのに、時間を要した。

「それって、どういう意味ですか」

怒気を含めた口調で洋輔が言っていると、館林は声を低くして事情を説明しだした。

「自殺と断定された事件を独自に捜査することは、同僚たちの輿感をかうことになります。ですので、しばらくはあなた一人で捜査を進めてください」

「は？」

あまりにも自分勝手な発言に、洋輔は憤りを感じた。

「ちよつと、待ってくださいよ。僕一人じゃ、捜査なんてできませんよ」

興味本位に協力を承諾した自分の愚かさを、今更嘆いた。館林はおそらく、初めからこうするつもりであったらうと推察される。

教育実習生として来ている洋輔だから、館林は協力を依頼した。刑事だと、どうしても警戒されてしまうが、教育実習生の洋輔であれば怪しまれることなく校内を回れるし、生徒や教師からも話を聞くことができる。

つまり洋輔は、館林に上手く利用されているだけだったのだ。丁度いたから、選ばれただけであった。

悔しさと恥ずかしさが、洋輔の心に渦巻いた。

「どうされました？」

優しく言う館林の口調は、全てを察した洋輔には腹立たしく感じたが、その怒りを何とか自制して、口を開いた。

「分かりました。一人で謎を突き止めます」

よく言えたと、自分で自分を褒めたくなる。いいように利用する館林のことはまだ許せていないが、それでも一度乗った話だ。それに、これが本当に他殺だとしたら、誰が犯人なのか知りたいという好奇心もある。利用されていると気づきながらも、捜査に誘っ

てくれた館林に少なからず感謝はしていた。

「すいません。皆の目を盗んで、なるべく合流できるようにがんばりますので」

携帯越しでも、館林の誠意ある口調は伝わってきた。

「必ず、姫島君の死の真相を解明しましょう」

上手いように乗っつけられた感は否めないが、一応納得した。館林が、一番捜査をしたいはずである。そう思うと、一人でも何とか頑張ってみようという気が起きる。相手が館林だからかもしれないが、「それでは、また連絡しますので。瀬郷さんも、何か分かったら逐一報告してください。出られない時もあります、なるべく出られるようにしますので」

洋輔は頷いて通話ボタンを切り、勉強机に向かった。これからの捜査をする上で、重要なことを紙に記しておこうと思いついたのだ。ルーズリーフを取り出し、手元のスタンドライトを点け、思考を巡らせながらペンを走らせる。次々と書きたいことが脳裏に思い浮かぶので、しばらくペんが止まることはなかった。

「大体、こんなところか」

ルーズリーフ三枚を使った充実感に、洋輔は満たされていた。三枚とも、小さな文字がぎっしりと詰まっている。せつかく書き上げたのに、読み返そうという気は起こらなかった。それでも、洋輔は十分満足していた。

この事件の詳細を綴ったのは、どこか忘れている箇所がないかどうかを確認する、一種の作業みたいなものだった。書いている最中にペんが止まることはなかったため、洋輔は安堵していた。

安心して捜査に臨める 胸中で呟き、洋輔はスタンドライトの光を消してベッドを移動し、横たわった。

あと三日で宝徳学園の休校が解かれる。そしたら洋輔は宝徳学園へ戻り、教育実習生として授業を教える傍ら、姫島良助が何故死ぬことになったのかという捜査も進めなければならぬ。

自分にそんな器用なことができるのかという不安はあった。先ほ

どの電話で強がって見せたものの、この事件の謎に辿り着いた自分の姿を想像することはできなかった。

一人だと気持ちが悪くなり、どうしてもネガティブな方向へ考えってしまうのが、洋輔の悩みの種でもあった。

「はあ」

思わずため息をついて、ゆっくりと瞼を閉じた。

時刻は昼の二時を示していたが、唐突に睡魔が襲ってきたのと、何もやることがないというのが手伝って、洋輔は眠りに落ちた。

目が覚めた洋輔はおもむろに起き上がると、窓のほうへ視線を向けた。外は、暗闇に包まれている。目覚まし時計に目をやった。深夜の一時を回っていた。

「最近、寝すぎかな」

自嘲気味に呟いて、洋輔はベッドを降りて洗面所へ向かった。

水道の蛇口をひねり、コップに水を並々すいで一気に飲み干した。喉が潤い、思考能力も徐々にはつきりしてくると、事件とは関係ない、ある疑問が不意に脳裏を掠めた。

俺が倒れた原因って、一体なんだったんだ。

事件のあった日、現場近くにいた洋輔たちは事情徴収のため食堂へ集められ、最中に洋輔は倒れた。その後、病院へと運ばれたようだったが、周りの証言によると目を覚まして暴れたという。しかし、その時の記憶が当の洋輔には全くなかったのだ。医師は、暴れた原因は分からないという。事件とは全く関係ないだろうが、原因を突き止めたかった。

両腕に目を落とす。見る度、吐き気を催す。原因が全く分からないという、気味の悪さからだった。

あの日、自分に何があったのか。記憶を遡る必要があった。

朝起きて、普通に朝食を食べ、意気揚々と宝徳学園へ向かった。そして教室の後ろで授業を見学し、昼食は食堂で摂って、午後も授業を見学。放課後になり、図書室で勉強していた最中に、肉の潰れ

たよつな音を聞いて、飛び出した。

肉の潰れた音の正体は、姫島が飛び降りて地面に衝突した際の音だった。初めて死体を見た洋輔は気分が悪くなり、昼に出会った佳代に連れられて保健室へ向かった。

養護教諭の松平は、気分が悪いと訴える洋輔に吐き気を抑制する薬を勧めた。市販といえども、やはり他人から渡された薬を服用することは躊躇われたが、せつかくの厚意を無下にすることはできず、飲んでおいた。

その後、現場付近にいた者たちは食堂へと集められた。当然、佳代や洋輔も食堂に待機させられた。

待機している間、急に気分が悪くなったことは明瞭に覚えている。学園の生徒が自殺したのに、平気な顔で勉強をしている生徒たちを見て気分が悪くなったのか、刑事たちの事情徴収を受けることへのプレッシャーが強くて気分が悪くなったのか、それとも、松平から受け取った薬で、気分が悪くなったのか。

可能性として挙げられるものは、おそらくこの三つだろう。このどれかが、洋輔の気分を著しく悪くした。

一番可能性があるのはどれか、洋輔にはある程度の見当がついていた。

松平から受け取った薬である。

他人から受け取った薬は服用すると、先生や親に昔から言われていた。他人が服用している薬は、自分に合っていない場合があるからだ。つまり、松平の服用している薬が、洋輔には合わなかったという可能性だった。

しかし、どうしても腑に落ちない点があった。薬が合わなかったというだけで、高熱を出して倒れたり、無意識のうちに暴れたりするだろうか。

松平用に医師が処方した薬なら、百歩譲って納得することが出来る。けど、市販の薬で、いくら合わないからといってそのような症状が出るとは考えにくい。その薬を、洋輔は吐き気を止めるため過

去に飲んだことがあるかもしれないからだ。

だとしたら、松平が洋輔にあげたのは処方された薬だったということか。

いや、それはない。松平は養護教諭だ。薬の知識は長けている。危険だということくらい、誰よりも承知しているはずである。

だとしたらわざと、危険となる薬を渡して飲ませたのか……。

一瞬、その考えが頭をよぎったが、すぐに否定した。

松平とは初対面で、洋輔を陥れる動機やメリットなどないのだ。

それに、故意にやったことがばれてしまったら、何らかの罪に問われる危険性だつてある。

考えれば考えるほど、謎は深まるばかりであつたが、ある決意が洋輔の心の中に芽生えていた。

休校が解けて学校へ行くことになる二日後、松平のもとを訪ねてみよう。

そうすることによって、何か分かるであろうと洋輔は踏んでいる。少し寄り道することになるが、館林の監視があるわけでもないの
で、捜査はゆっくり進めていくことにした。

とりあえず二日後、学校へ行ったときに考えればいい。こんなアパートで一人、推理を巡らせても確認のしようがない。

洋輔は踵を返して再び、ベッドに横たわった。

目は完全に冴えているので眠ることは出来ず、気づけば窓の外は明るくなっていた。

第七章

「あ、瀬郷君」

午前七時、職員室へ入ると三学年主任の橋本に名前を呼ばれた。

「はい」

駆け足で橋本のデスクのほうへ向かう。橋本の表情は、初対面の時よりも心なしか、幾分暗かった。やはり、あの自殺騒動の件が重くのしかかっているのだろうか。

「君、大学の方は大丈夫なのかね？」

「まあ、はい」

橋本の口調には、生気が感じられなかった。自殺した姫島が三年で、しかも受験が理由ということであったから、マスコミの、三学年主任に対してのバッシングも相当なものであったと予想される。気の毒に思えてきた。

「どうしても教育実習を続けたいというのなら構わないが、帰っても大丈夫なんだよ」

言葉とは裏腹に、口調には帰ってほしいというニュアンスが露骨に込められていた。それを察した洋輔は、反抗的な態度をとった。

「いやです。ここで一ヶ月、教育実習を続けさせてもらいます」

橋本がため息を吐いたのは不愉快だったが、敵を作るわけにもいかず、ここはぐっと堪えた。

「失礼します」

一礼すると、自分のあてられたデスクに座った。

周囲の視線がやや冷たいのは、覚悟していたことだ。それでもむしろ、感謝しているぐらいだ。追い返すのが普通の対応だと思う。

洋輔には、なんとしてもここに留まらなくてはいけない理由があった。姫島の死の真相を突き止めるためだ。

暇な時を見て捜査に合流するといった館林を信じ、洋輔は独自に調べることを決意していた。

その前に、保健室の松平のもとを訪れなければいけない。体調が悪化したのは、松平がくれた薬に原因があると洋輔は考えていた。保健室に行けば、何かしら分かるかもしれない。保健室を訪ねるつもりである。

「瀬郷君」

呼ばれて振り返ると、三学年に世界史を教えている山下が教科書を片手に立っていた。

「準備のほうは順調かい？」

長身で体格もよく、端正な顔立ちをしているのだが、感情のない瞳と、抑揚のない山下特有の喋り方は、冷たい印象を与えた。

洋輔は山下が苦手だったが、一ヶ月お世話になる先生なので好みのことなど言っていられない。嫌われないようにと、心がけていた。「ええ、一応計画は立てたのですけど」

言つて、洋輔は授業内容を書き込んだ大学ノートを開いて見せた。腰をかがめ、大学ノートを覗き込みながら山下は言った。

「まあ、君の学力であれば問題ないだろう」

そう言われても、洋輔は安心できないでいた。この程度の授業じゃ、彼らはきつと満足してくれないだろう。

しかし、これが洋輔の限界でもあった。もう少し、実力に見合った高校に行かせてくれれば深刻に悩むこともなかったのにと、思っていた。しかし、この学校に教育実習生としてきていなければ姫島の死の真相を捜査することができなかったわけで、複雑な心境を抱えていた。

憂鬱な気分には陥って、徹夜で書いたノートを見返していると、不意に胸ポケットが震えた。マナーモードにしている携帯に、着信が入ったのだ。

携帯を取り出して開くと、画面に館林刑事と表示されていた。

焦る気持ちを押さえ席を立ち、職員室を出て携帯に出た。

「もしもし」

自然と声が小さくなるのは仕方なかった。刑事と、姫島の事件の

ことで接触していることが回りに知られたら、大問題だ。

「やあ、瀬郷さん」

館林の声は、妙に明るかった。

「どうですか？ 順調ですか？」

「まだ学校始まったばかりですから」

苦笑して、洋輔は答えた。

「そうですね。一応、電話してみただけです」

洋輔には、館林の気持ちが痛いほど分かった。

姫島の死の真相を誰よりも明らかにしたいと思っているのに、現場に行つて捜査をすることができないもどかしさが、館林にはあるはずだった。職場で、館林はどんな気持ちで洋輔の報告を待ち望んでいるのだろうか。

「マスコミもこの事件を自殺と断定して相手にしていませんが、我々でそんな連中を見返してやりましょうよ」

意気込む館林に、洋輔は少し励まされた。

この事件が起きた翌日、マスコミは飛びつき、テレビの報道番組もそればかりを話題に取り上げた。何せ、都内屈指の進学校の生徒が、受験を苦に自殺したのだ。当然、話題の種にされる。しかし、宝徳学園の校長はイメージダウンを危惧し、あらゆるところへ手を回してマスコミの報道を、数日後には沈静化させた。世間の反応も今では冷めたものだった。姫島の自殺について特に突っ込んだことは報道されなかったので、世間もただ自殺と断定された事件に、それ以上の興味が湧くことはなかったのかもしれない。

洋輔は、悔しさがこみ上げてきた。他殺かもしれないのに、誰も再捜査してくれないなんて。今頃犯人は、悠々と生活をしているのだろう。安全圏に逃げたとでも思っているのだろうか。

許せなかった。必ずこの手で犯人を暴いてみせる。

「分かったことがあつたら、報告させていただきます」

「そうですね」

携帯越しに、何度も満足そうに頷く館林の姿が想像できて、洋輔

は噴き出しそうになった。

「こつちのことは心配しないでください。なんとかやってみせますから。では」

館林の返事を待たず携帯を切ったのは、そろそろ職員会議が始まるといふ合図の鐘が校内に鳴り響いたからだだった。

急いで職員室へ戻ると、すでに他の教職員たちは自分の席についていた。その光景を見て、洋輔は後ろめたさを抱いた。

「これで全員、そろいましたね」

教頭のデスクの前に立つ校長が、露骨に非難を込めた口調で言ったのが、洋輔の心に深く突き刺さった。やはり自分はお邪魔なのだと、痛感させられた。

「今から、職員会議を始めます」

校長の報告から始まり、他の先生たちも今日のことについて話し終え、予定していた時間より十五分早く会議は終わった。

「えー、時間も余ったことですし、少々これからのお話についてさせていただきたいと思います」

若干、職員室に漂う空気の色が変わったことを、洋輔は察知した。皆が固唾を呑んで注目している中、校長は躊躇いがちな表情を浮かべながら口を開いた。

「まずは、瀬郷君のことなのですが」

一斉に、教職員たちは洋輔に視線を向けた。

いくつもの目が自分に向けられていることに当惑しつつも、それを受け止めて、洋輔は校長を直視した。

「姫島君が自殺した日、捜査に参加した館林刑事が私に、電話で頼んでくれました。瀬郷君の教育実習を、この事件をきっかけに止めさせないでくれと。私は彼を外すつもりはありません。それはあくまで彼の意思です。彼が止めたいと言えば、もちろん止めても結構ですし、続けたいというのなら、続けても構いません」

皆が、洋輔の反応を窺っていた。見守られている中、洋輔は周りのプレッシャーに押しつぶされることなく、頷いてみせた。

「というわけで、彼は一ヶ月間、ここで教育実習を続けることになりません」

歓迎ムードでないことは、一目瞭然だった。何人か、落胆の表情を浮かべている者もいた。

自分がお邪魔だというのは、とうに自覚している。それを覚悟した上で、教育実習を続けるのだ。

全ては、謎を解き明かすために。

「では次に、マスコミへの対応についてですが」

全員が、校長へ向き直る。

「姫島君の自殺は、大々的に取り上げられました。取材をされた生徒、先生も数多くいらっしやるでしょう」

苦虫を噛み潰したような表情を浮かべ、校長は疲れきった口調で言った。校長はもちろん、他の教師、生徒たちもマスコミに追いかけられたのは、容易に想像できた。

佳代もまた、マスコミに捕まったのだろうか。

想像するだけで、胸が締め付けられる思いだった。泣いている佳代の横顔は、どこか愛おしくて、思い出すたびにこの事件の真相を突き止めるという決意が強くなっていった。

「ですが、もうとりあえずは安心です。何とか警察と連携して、事態を収拾することが出来ました」

今やもう、姫島が自殺したということを報道している番組はないに等しかった。やはり宝徳学園の圧力が働いていたのかと、洋輔は思い知った。

「このままじつとしていれば、マスコミに騒がれることもないでしょう。姫島君のためにも、そっとしておきましょう」

一瞬、校長と目があい、洋輔は慌ててそらした。校長の目は、言いながらしっかりと洋輔を見据えていた。

洋輔は、校長の言った言葉が自分に向けられているような気がしてならなかった。

まさか、洋輔が館林と姫島の自殺について捜査をしようとしてい

るのを、見抜いているのか。だから、洋輔の目を見て校長はあんなことを言ったのだろうか。

嫌な想像が脳裏を掠めたと同時に、チャイムが鳴った。職員会議の終わりを告げるチャイムだった。このぐらいの時間から、生徒たちは続々と登校してくる。

「それでは、会議を終了いたします」

洋輔は校長に呼び止められないよう、気配を消して職員室を出た。「ふう」

思わずため息を漏らし、気持ちを落ち着かせるためトイレへと駆け込んだ。

しばらく頭の中を整理して、ポケットから携帯を取り出した。

着信履歴を開き、館林のもとへ電話をかける。

迷惑なことは百も承知だが、どうしても今確認を取る必要がある。洋輔は、館林が宝徳学園にわざわざ教育実習のことについて電話を入れたことで、校長に悟られたのではないかと、考えていた。

「もしもし」

意外にも、館林はすぐに出た。

「あ、館林さん」

洋輔のすぐるような口調が携帯越しに伝わったのか、館林は声を低くして言った。

「どうされました？」

館林は、校長に自分たちの計画が悟られたことを自覚していないのか。少し失望した気分で、洋輔は事情を説明した。

「なるほど」

一通り言い終わると、館林は唸った。

「そんなはずはないと思いますけどね」

「でも、校長と目が合ったんです」

「気のせいじゃないですか？」

楽観的な館林に、ますます憤りを覚えた洋輔は、つい反抗口調になっちゃった。

「まあまあ、落ち着いてください。仮に我々の思惑がばれていたとしても、要は尻尾を捕まればいいのです。だから、捜査は内密にお願いしますよ」

言い合っても仕方ないという理性が働き、ここは引き下がったが、納得したわけではなかった。

校長は、事件を蒸し返されないことを望んでいる。伝統ある宝徳学園の名誉を、これ以上傷つけないために。洋輔たちが、姫島の自殺について捜査しているところを目撃したら、校長がどのような手段に出るか、推測ができた。

洋輔の教育実習は中止になり、大学からも嚴重な注意をくらうことになるだろう。館林も、同僚たちから輦蹙をかうことになる。

ばれたら、館林の願いがついてしまう。そして、事件は永久に謎のままだ。

そんなことには、させない。

全ては洋輔にかかっていた。館林の言った通り、事を内密に運ばなくてはならない。

「何しているの？」

いつの間にか自分の後ろに、生徒が立っていた。驚くほど冷淡な口調だった。

「うわ！」

動悸が一気に激しくなる。手に持っていた携帯を、危うく落とすところだった。

男子生徒は、宝徳学園の生徒特有の冷たい目をしていた。端正な顔立ちに加え、清潔な身なりをしており、髪も綺麗に揃えていて周りに好印象を与えそうな容姿をしているのだが、人を寄せ付けない雰囲気、存分に漂わせていた。

「ちよつと、邪魔」

言って、男子生徒は前に立っていた洋輔を手で押しのけた。

悪いのは自分だとはつきりと自覚しているが、男子生徒の言い方に腹が立った洋輔は、謝りもせずトイレを出た。

「なんだよ、あいつ」

悪態をつき、腕時計に目を落とした。ホームルームが始まるまで、あと五分。洋輔は一時間目の授業を行うため必要な教材をとり、職員室へ戻った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8691z/>

受験戦争

2011年12月29日15時46分発行